

趣旨説明

〈すべての学習者〉の学びを保障するために
我々は何を変えるべきか

外国語授業実践フォーラムSIG

「言語教育におけるインクルージョンを考える会」

- 中川正臣（城西国際大）
- 植村麻紀子（神田外語大）
- 山崎直樹（関西大）

1. インクルージョンとは何か？

- inclusion
- 何者をも排除しないこと
- インクルーシブな社会：何者をも排除しない社会

II. 「言語教育におけるインクルージョン」

- 何者をも排除しない言語教育
- なぜこれを考えようと思ったか？

例1: 療育センターにいる子供たち

- いろいろな「障害」をもった子供のための施設
- 彼らの外国語教育はどう保障されるんだろうか？

例2: 脳性麻痺の学習者

- ほとんど独学で韓国語を習得
- この学習者が教室にいたら？

例3: 視覚・聴覚の障壁をどう超えるか

- 彼らが外国語を学ぶ教室にいたら
- 多数派がふだん使っているコミュニケーションの手段が有効でないとき

例4: 発達障害に対する昨今の関心

- コミュニケーションの方式のちがい
- 知覚過敏等の問題
- 教師が知らなかった／気づかなかっただけで、今までも教室にいて、困っていたのではないか
- 本人の努力だけで乗り越えられない障壁を本人の努力や態度のせいにして低い評価をしてこなかっただろうか

(本日は、「障害」に焦点があたっていますが……)

例5: 学習者の（言語的）背景

- 出自、エスニシティ、言語的背景の多様化
- 教室で使う教授用言語に必ずしも習熟していない

例6: 学習者の社交的個性

- 他者とのコミュニケーションを避ける
- 協働作業を好まない
- 自己開示を嫌悪する
-

まだまだあります

- LGBT
- 精神疾患

III. なぜ、インクルージョンに 近づく努力が必要か

- 分割・排除
 - これにより我々は異質な／多様なものと出会う機会を奪われている
 - これが進行したコミュニティが快適と思えない
 - される側になる可能性……当事者

他人事ではない

- インクルージョンが実現したコミュニティは、多数派にとっても居心地がよい
（インクルージョンは多数派が少数派に与える恩恵ではない）

IV. 事例に応じた対応とあらかじめ考えるデザイン

- 事例対応は限界があるし、気づかないこともある
- 特別支援教育や心理カウンセラーの仕事を言語教育に持ち込むのが目的ではない
- あらかじめ、「できるだけ排除をしない」デザインを考えておくことが必要

何をデザインするか？

- ソフト、ハード
- 個人、社会

インクルージョンを実現するためのきっかけ

- インクルーシブ・デザイン（化）／ユニバーサル・デザイン（化）

V. 言語教育のスペシャリストとして

- 言語学習は、さまざまな技能（音声認識、文字認識、音声表出、文字表出、交渉、協働……）を要求する
- この領域に焦点をあてたインクルージョンを考えることも専門家の任務

VII. 考えるべきデザイン

- 組織（社会全体、公的機関、学校の支援……）
- カリキュラム（教育理念、達成目標の修正……）
- 個々の授業内（教授法、教材……）